

---

# 武装神姫 バトルシンフォニア

郭堯

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

武装神姫 バトルシンフォニア

### 【Nコード】

N3987U

### 【作者名】

郭堯

### 【あらすじ】

もうじきPSP版第二段が出る武装神姫の二次創作です。あまり流行っている題材ではありませんが、これを機に武装神姫に慣れ親しんでくださる方が増えれば幸いです。尚、アルカディアでも投稿しています。

## 第一話 「いや、親にお年玉預けて帰ってくるわけないじゃん」

万の単位の観客を収容できる規模の巨大なドーム。その観客席は人で埋め尽くされ、大気を震わすほどの歓声に包まれていた。

客席に囲まれたフィールドには巨大な機械の塊、その中央から空中に映し出される巨大な立体映像。そして機械を挟んで椅子に腰かけ対峙する、ヘッドセットを着けた一組の男女。

片や高校生ほどの白い詰襟の少年。中央で分かれた前髪と銀のフレームの眼鏡、その奥から覗く静かな眼光。その表情にはうつつすらと笑みが浮かんでいる。

反対には黒を基調としたレザージャケットという個性的な格好の、十三、四歳ほどに見える少女のようだ。腰まで届くやや癖のある黒髪をカチューシャで纏めている。スーツの男とは対照的にこちらの表情には焦りが見える。

機械の上にある巨大投影装置とは別に、二人の目の前にもモニターがある。

空間に映っているのは機械の鎧を纏った黒と白の少女たち。

白の少女は背負った、縦に伸びた二本の突起型のユニットが特徴的なライティングユニット。そこから青い炎を吹かせ、宙を駆ける。

黒の少女は背中に備えた一对の巨大な腕を振り回す。誰であるうと一目で感じ取れる圧倒的なパワーを振るい、敵を引き千切らんと掴みかかる。

だが黒の少女の、合わせて四本の腕は届かず、白の少女の持つ巨大な砲身からの閃光に晒される。

『いい加減ちよこまか逃げ回ってんじゃないわよ！アーンヴァルタイプ！』

立体映像を映し出す機械に設置されたスピーカーから漏れ出る黒の少女の怒りと焦燥混じりの声。対する白の少女はどこ吹く風とばかりに、手にしている大型レーザーライフルとアサルトライフルで攻撃を加え続ける。

既に罅割れ出していた黒の少女の装甲は、その欠損を加速させていく。それは一方的な蹂躪に見えた。

『く……こなくそおおお！』

黒の少女が手を翳し、0と1で構成されたエフェクトと共に現れるグレネードランチャー。放たれる榴弾は、されど白の少女に届きはせず。逆に白の少女の背から板状の遠隔攻撃端末が放たれ、グレネードランチャーを破壊されてしまう。

『サレンダー（降参）するなら構いませんよ？私と貴女では絶望的なまでに相性が悪い』

『舐めるな！あんななんざ捕まえたら一瞬なんだよ！』

放たれる白の少女の無感情な言葉。それが黒の少女の神経を逆撫でる。黒の少女はきつく歯を食いしばる。0と1の数字となつて崩れていくグレネードランチャーを捨て、巨大な機械の両足、その裏のバーニアを吹かして飛び上がる。

「落ち着いて！空中戦じゃ……！」

レザージャケットの少女がヘッドセットのマイクに叫ぶ。だが、その言葉は間に合わない。

「セリア、決める」

『了解、モード・ユニコーン発動』

白の少女のフライトユニットがその形を変えていく。やや下向きに集中していたバーニアの、ほぼ全てが後ろに向けられる。そして手に持っているレーザーライフルとアサルトライフルを接続、一つの武装ユニットとなる。そして砲身から現れる、蒼い荷電粒子の馬上槍。

『ゲームオーバーです』

フライトユニットのバーニアを最大出力で噴射、荷電粒子の槍を構えての突進。その穂先は黒の少女の腹に突き刺さり、勢いのままに地面に激突。そして土煙を巻き上げながら、黒の少女の体で大地を削り取っていく。

やがてバーニアの音も止まり、舞い上がった土煙が二人を完全に覆い尽くす。会場の声も止み、誰もが立体映像に注視していた。

そして土煙が晴れていく。そこには白の少女だけが立っていた。その足元には、0と1に分解されていく黒の少女の姿。

そして、白の少女は荷電粒子の槍が消えた武装ユニットを天に突き上げる。同時に、それに合わせるように突き上げられる男の拳。そして、それに合わせるように会場に流れるアナウンス。

『勝者！コウダイ選手、セリアペア！』

瞬間飛交う歓声。

『バトルロンド、KONAMIサマーカップ優勝者はコウダイ選手！全国ランキング三位のFUMIKO選手とネメアのペアを圧倒！全国ランキング一位の貫禄を見せたあああ！』

脱力したように、椅子に背を預けるレザージャケットの少女。両手で顔を覆い、その表情は窺い知れない。

一つの戦いが終わった。それは一つの夏の終わりを意味した。この場で対峙した二人のだけではない、この夏を戦った全ての神姫マスターたちにとっての夏が。

2036年、人の生活は武装神姫と呼ばれるロボットと共にあった。

全長が大凡15cmという小さな美少女型ロボットであり、人間とほぼ同様の人格と感情を持ったこのフィギュアロボットたちは人間の善きパートナーとして色々な場面で活躍している。

ある者はその一昔前の据え置き型PCを凌ぐHD容量を利用し秘書のように使い、またある者はペットを飼えないことに対する代償行為として可愛がった。

そんな武装神姫の最たる特徴は、その名の示す通り、武装し戦い競うことにある。

武装した神姫たちのデータで、電脳世界に作り出されたフィールドで戦う。通称神姫バトル。それがこの時、日本で最も流行していた娯楽であった。

2040年、秋。

その晩、一人の少女が自分の机の上で、ノートにペンを走らせていた。ノートの上には幾つもの数字が整然と並んでおり、何かの簿記のようであった。

記されているのは少女のこれまでのお年玉、毎月のお小遣いの残額をこのノートに書き続けてきた。全ては自分の神姫を手に入れるために。

一つの神姫の値段は、機体にもよるが基本的にフルセットで最新のノートパソコンと同等の値段になる。子供が簡単に手に入られる物ではない。それでも彼女はそのための努力を続けてきた。

ここ二年間のお年玉は一円も使っていない。お小遣いも、友達との外出を減らし、毎月のお菓子代を浮かせてきた。お陰でここ最近はいエツト知らずな程だ。

だがそんな日々もこれで終わる。今までのお小遣いの残りと預けてあるお年玉、合わせて二十万ポツキリ也。

「永かつた」



そう、永かった。彼女とて年頃の女の子だ。友達とシヨッピン  
グモしたいし、美味しいお菓子だって食べたい。

二年は本当に永かった。でもこれでこの禁欲生活からも開放さ  
れる。明日、買いに行こう。放課後に友達を誘って。そう心に決め  
て。

少女は体の疲れを解すために、日本人にしては色素の薄い髪の毛を掻き揚げながら大きく背を伸ばす。そして少女は澀刺さを映し出すかのように瞳を輝かせながら席を立つ。

少女は自分の部屋を出て、キッチンで洗物をしているだろう母親に声を掛ける。

「お母さん、今まで預かってくれてたお年玉、使いたいんだけどっ」

「そんなのとっくに給食費とかでなくなってるわよ」

「……………え？」

少女、木下きのした 綾乃、あやの 母親の言葉の意味を理解し、絶望の淵に落とされる五秒前。

「いや、親にお年玉預けて帰ってくるわけないじゃん」

翌日の学校、その休み時間で友人との他愛ない会話。机に突っ伏しながら語る彩奈に突っ込みを入れるもう一人の少女、前田まえだ詩織しは苦笑いで答える。

母親に預けたお年玉は戻ってこない。それが日本の一般家庭の不文律である。

「だって今までみたいに自分で持ってたら貯められる自信なかったんだもん」

ただそんなことを経験せず、話でしか知らない彼女は、昨日初めて実感としてそれを知ったのだった。

「できさ、詩織、こんな訳で私今日は部活休むよ。流石に今皆の神姫見たら嫉妬でどうにかなっちゃいそう」

綾乃は顔だけ詩織に向けて、零すように告げる。

詩織は仕方ないな、と困った声で呟くと、笑顔で了承した。

綾乃が部活と呼んだ、湖奈美高校神姫同好会。その名の示すとおり、正式な部活ではないが、色々な神姫関連イベントに参加してきた、地元ではちょっとは名の知られているサークルだった。

そのメンバーは当然神姫を持っているのが好ましいが、別に持つてなくても入部は出来る。仕事は基本的に他のメンバーの神姫関連の手伝いということになるが。

いつもなら他のメンバーと一緒に神姫の新しい情報を探したり、関連雑誌見てたりしているけど、彩奈はそんな気になれなかった。はあ、と溜め息を吐く。お金はないのに、いつの間にか駅前のスパーにいた。PCコーナーの横に並べられた神姫のコーナーに並べられた色取り取りなパッケージを眺める。

玩具のようなパッケージなのに、中身はそこらのPCも真つ青な高性能電子機器。その為値段も並みではない。綾乃の財布には還らぬお年玉とは別に貯めた四万がある。尤もそんな額では、低コスト枠の神姫、ライトアーマーの金額にすら届く訳もなく。

「はあ、帰ろ」

どうせ買えないのだから、この場においても空しいだけ。綾乃はスパーを後にすると、家に向かう。

ふと道の向かいから、きよろきよろと落ち着きなく周囲を見回しながら歩いている人影が、彼女の目に付いた。

その人物は自分より少し小柄で、長い前髪と大きな眼鏡で顔は良く見えない。来ている物から見れば男だろう。

手には何か紙を持ってそれを見ながら歩いている。

「やっぱその地図当てにならないよ、ボス。大雑把過ぎてどこがどこだか」

「そうなんだよね。せめて交番が見つければ道が聞けるのに」

その人影から二つの声。綾乃には、どちらも女の子に聞こえた。どうやら人影のジャケットのポケットに紫の髪の神姫が入っているのに気が付いた。声の片方はその神姫のものようだ判断した。

紫のショートカット、赤い瞳。多くのオーナーが着けているツインテールパーツは着いていないが、綾乃はそれが悪魔型神姫、ストラーフであると気付いた。

やがて彩奈と相手の距離が近付き、相手も彩奈に気が付いた。

「あ、ねえねえそのあんだ、この辺りの人？良かったら道を教えて欲しいんだけど」

気付くや否や、といった早さで相手の神姫が綾乃に声を掛ける。そのやや礼儀に欠ける物言いに、そのオーナーであるう相手が慌てて頭を下げる。

「こらこら、いきなり失礼だろ、そんな言い方」

その人物は人差し指でこつんと神姫の頭を叩いた。ふにつ、と可愛い声で神姫が唸った。

「あの、すみません、ちょっと道を教えてもらいたいですけど」

「あ、はい」

その人物と神姫のやり取りに微妙に和んだ綾乃。悪い人ではなさそうだと、相手の願い出に応えることにした。

半時間後、綾乃は家の近くの商店街に来ていた。道を尋ねてき

た人物の目的地に心当たりがあったのである。

中古ホビー店『ぶれいど』。元々小さな玩具屋だったのが、お爺さんの店長が引退して、お孫さんが引き継いだと綾乃は耳にしたことがあった。

「わざわざ送ってもらってすみません。お陰で助かりました」

「いえ、私も家がこつちの方でしたから」

綾乃の言葉通り、家の方角だったので直接案内してきたのだった。店はシャツターが下りており、臨時休業の張り紙が張られている。

「お、遅かったな史貞<sup>ふみさだ</sup>。皆待ってるぞ」

玩具屋の前の二人に、頭上から声が掛かる。声に釣られて二人が顔を上げると、二回の窓から声を掛けてくる男の姿があった。

大学生くらいの歳だろうか。どこでも見るような短髪と、がっしりした顎のライン、そして気だるげなタレ目。白いTシャツ姿のどこにでもいそうな青年だった。

「遅かったなって、兄さんの書いた地図、どこかどこだか全然

わかんないって」

綾乃の案内した相手、史貞と呼ばれた少年が不満気な声を上げる。

「お陰でこの人に案内してもらったことになったし」

「あら、そりゃ迷惑掛けちゃったな。ごめんね、お嬢ちゃん」

どこか緩い笑顔で謝る青年。だが面識こそないとは言え相手は年上の青年。そんな相手に頭を下げさせるのに抵抗を感じた綾乃が気にしないでと伝えようとした時だった。

「ちょっとフミちゃん着いたの？ちょっとどいてかねさだ鉦貞」

「ちよっ、おまつ、押すな！落ちる！」

綾乃が声を出そうとしたタイミングを奪うように、二回の奥から女性の声が聞こえてくる。同時に二階の窓から顔を出していた青年の上半身がぐいぐいと外に乗り出して来る。

「おっ、フミちゃん元気？」

青年を半ば押しつけるように姿を見せたのは、やはり大学生ほどに見える年頃の女性だった。

跳ね上がった前髪、後ろ髪はアップにされている。パツチリした目に細いフレームの眼鏡という大人の女性といった人物だった。そして窓から覗くその体付きも、綾乃には大人のそれに見えた。

「……あゝ、お久しぶりです、春菜姉さん」

少々引き攣った笑顔を浮かべる、史貞と呼ばれた少年。

これが木下綾乃と、明智史貞あけち ふみさたの出会いであり、綾乃を武装神姫と結びつける出会いとなるのだった。



第一話 「いや、親にお年玉預けて帰ってくるわけないじゃん」(後書き)

大分気温が上がってきた今日この頃、皆様如何お過ごしでしょうか？どうも、郭堯です。

さて、二次創作界では余り目立たない武装神姫のSSとなりました。これまで時折オンラインで遊んでいたのですが、この度オンラインサービス停止とのことで、寂しい気分となって筆を取りました。

神姫バトルに関しては、関連作品ごとに仕組みが違いますが、うちではこんな感じになりました。

取敢えず、書くからには頑張っていくつもりです。

第二話 「もうほんと、神姫の為なら上下座でも何でもしますから」

人間の縁の言うものは、奇妙な場所で繋がっているものだった  
りする。木下綾乃はこの日、それを体感した。

「今日から転校してきました、明智史貞です」

昨日会った少年が、学校指定の詰襟姿で教壇に立っているのだ  
から。

「ふうん、じゃあ明智君って商店街の玩具屋の店長の弟さん？」

「うん、なんでも親が海外に転勤とかで、お兄さんを頼って来  
たんだって」

休み時間になり、転校生イベントお約束の質問タイムでクラス  
メイトに包囲されている史貞を眺めながら駄弁る綾乃と、その親友

前田詩織。前日に面識のあった綾乃は史貞のことを話していた。

正直綾乃は昨日の出会いが続くものとは思っていなかった。流石に住んでいる場所が近いから同じ学校はあるとは思っていたが、クラスメイトになるとまでは考えてはいなかった。

その後、史貞の方も綾乃に気付いたようだったが、クラスメイト包囲網の前にお互い口を交わすことも出来ずに時間が過ぎていった。

そして昼休み、綾乃と詩織は学校の屋上で弁当箱をつついていた。

本来湖奈美高校は屋上を開放していない。だからこそ二人はこっそり人のいない屋上で開放感を味わいながら弁当に舌包みをうつのが好きだった。

「あ、そう言えば綾乃。昨日、綾乃がいない間の事んだけど、織田先輩今年のサマーカップのブルーレイが手に入ったって」

織田先輩とは三年生の上級生であり、二人の参加している同好会の会長である。どんな人脈があるのか、色々と入手困難な代物でも手に入れてくる色んな意味でありがたい人物であった。

「へ〜、凄いね。あれ、予約開始当日に初回分全滅したって聞いてただけど……まさかヤフオ……」

「ダメ！それは神姫ファンとして言っちゃダメ！」

そんな他愛ない会話の最中、屋上にやってくる人間がいた。

「あ、明智さん」

やってきたのは件の転校生、明智史貞。手には弁当箱が入っているのだろう包みを持ち、大分疲れた表情をしている。

「あゝ、ちょっと遅くなったけど、昨日はどうも」

どうやらクラスの転校生包囲網は尚健在らしく、落ち着いて食事も出来ないだろうと上手く逃げてきたそう。

その後、綾乃の知り合いという縁で、三人で食事という流れになった。高一という年頃の男子にしては珍しく、史貞は初対面の女子と食事をすることに抵抗がないようだった。会話はそれなりに弾み、話はその内綾乃のお年玉消滅事件に及んだ。

「いくらなんでもさ、今時お年玉なくなった理由で給食費はないと思うのよ、それも私のじゃなくて妹の！」

「まあ、気の毒だけど、それじゃ暫くは神姫は……あゝ」

そんなやり取りの中、史貞は一つただで神姫を手に入れる心当たりを思い出した。

「あゝ、運が良ければどうにかなるかも知れない」

呟きに近いその声に、綾乃が反応した。

「え、どういう意味？」

「いや、言っていないのかなこれ？」

言い出しておいて、口籠る史貞。だが、彼の口振りから、綾乃は神姫入手の希望を持ってしまった。今更生殺しはごめんだった。

「ほんと何かあるなら教えてください。もうほんと、神姫の為なら土下座でも何でもしますから」

言葉の通り、本当に土下座でも何でもしそうな勢いの綾乃の姿に、思いっきり引く史貞。助けを求め詩織に視線を送るが、詩織は困った様子の笑顔を浮かべるだけだった。

流石に女の子に目の前で土下座されたくない、史貞は折れることにした。

「えと、木下さんは昨日会った春菜姉さん覚えてる？」

史貞の心当たりとは、兄との共通の知人、浅井<sup>あらい</sup> 春菜<sup>はるな</sup>から聞いた話だった。

浅井春菜は今年から神姫メーカーの一つ、アームズインポケット社に入社している。このアームズ社がディオーネコーポレーションという企業と新型神姫の開発が進められている事は、雑誌にも取り上げられ、それなりに知られている。

その新型神姫のお披露目イベントが近く行われるのだが、そのイベントで告知されていないサプライズ企画があることを春菜から聞いていたのだ。

「で、イベントの最後の方で非神姫オーナーを対象にした、新型の先行生産型のプレゼント抽選会があるって……」

「プレゼント！それってタダってこと！？タダでもらえるの！？」

「ううえ！？いや、もらえるとは限らなグエっ」

綾乃暴走。この暴走により、史貞の食いかけ弁当が犠牲になるのは数秒後の事。

放課後、二人は同好会に参加する為に、ある空き教室に向かっていた。正式な部活でない神姫同好会に部室はないが、使われていない空き教室を貸してもらっていた。

神姫オーナーである事もあって史貞にも声を掛けてみたが、兄の手伝いがあるとやんわりと断られた。

「失礼しまーす」

声をそろえて挨拶と共に教室に。だがそこで二人を待ち受けていたのは酷く嫌な光景だった。

「そんな、俺のFUMIKOちゃんが」

ガタイのいい、マッシブな男の机に突っ伏して泣いている姿。

「しっかりしろ、兄貴。後輩たちが来ちゃったぞ」

突っ伏している大男と、それを嗜める赤い神姫。

神姫同好会副会長、三年の柴田しばた 宗一郎むねいちろう。そして彼の神姫、アーク型、パプリカである。

「えと、これは一体……」

その光景に綾乃と詩織は戸惑う。宗一郎はそのガタイにを裏切らず、顔も強面である。柔道部主将と言われても違和感のない男が泣いている姿はそうそう目にするものではない。

「あれ？どうしたの、二人とも扉の所で」

二人の後ろから物静かな男の声。

「あ、丹羽先輩、織田会長」

後ろからの声、それは二年の先輩、丹羽にわ 浩輔こうすけ。同好会では綾乃と同じく神姫をもたないメンバーである。個性的な宗一郎と相対的にどこにでもいるような容貌で、メンバーの中で一番影が薄い人物である。



その後ろには黒一色という改造セーラー服の少女、織田<sup>おだ</sup> 火種<sup>ひたね</sup>。小学生並みの体格と幼い容貌だが、それでもこの同好会の会長である。

「ぬ、柴田、何ごとだ。いい年した男が鬱陶しい」

肩まである黒髪を揺らしながら空き教室に入っていた火種は鞆からセーブモードの神姫とクレイドル、ブルーレイのパッケージを取り出し、教科書とノートだけになった鞆で宗一郎をぶん殴った。

宗一郎はへぐつ！と呻いき、そこで漸く他のメンバーが来ていることに気付いた様子だった。

「あ、会長、皆も来てたのか」

本来は豪気という言葉を形にしたような宗一郎だが、正気に戻ってもどこか元気がない。

「お前が元気のない理由など大方の予想がつくが、言ってみる。何事だ？」

呆れ気味な声で尋ねる火種に、口籠る宗一郎。代わりに答えたのは彼の神姫だった。

「いや、なんちゅかさ。兎に角この記事を見てくれ」

そう言っただけで差し出されたのは一冊の雑誌。月刊神姫、その名の通り、新作神姫から公式イベントなど、神姫に関する情報を取り扱う雑誌である。

そして開いていたページで目に留まった見出し。

「最強ボーカリストマスター終に全国ランキングドロップアウト、復帰は絶望的か、か」

記事はFUMIKOという全国ランカーが、二ヶ月以上オフイシャルバトルに参加しなかった為、ランキングデータが失効したものである。

「お前がこのアイドルモドキに熱を上げているのは知っているが、何も泣くことはないだろう。後輩たちが、と言うか私が引く」

火種の溜め息混じりの言葉に、流石に宗一郎もバツが悪いようだ。神姫のマスターとしての活動の他に音楽活動もしているため彼女のファンは少なくない。それでも程度というものがあるだろう、と。

尤も大の男が見た目中学低学年の女の子に説教される光景も、

人を引かせるに十分な威力であるのだが。

「まあ、いい。せっかく今日は皆とサマーカップのブルーレイを見ようと持ってきたのだ。詰まらん事ばかり話していても仕方ない。前田、お前の神姫も起こしてやれ」

そう言っつて火種は鞆から出しておいた神姫を起動させる。

「起きよ、彩雲<sup>あやぐも</sup>。授業は終わったぞ」

「……ふう、お早うございます、姫様。今日もご学業、お疲れ様でした」

火種の神姫は、神姫サイズの桜色の着物に身を包んだ戦闘機型神姫、飛鳥<sup>あすか</sup>の一体だった。小さな欠伸と共に動き出す。

「それじゃ、私の方もっと。起きて、八房」

「……はい、お早うございます、主殿」

対して詩織が鞆から出して起動させたのは犬型ハウリンの八房。言葉少なげに起き上がると、詩織に侍るように横の机の上に移動す

る。

「さて、これで我ら神姫同好会一同が揃った訳だな。では今日はこのサマーカップ2040のブルーレイの観賞を行う。これには全国屈指の神姫たちとマスターたちの戦いが収められている。格神姫とマスターはバトルのレベル向上の為に心して見るように。まあ、神姫持ちでない二人は純粹に楽しんでくれればよい」

話しながらプレイヤーの準備を進めていく火種。プレイヤーそのものは事前に宗一郎が学校の備品を借りてきている。

そして準備が終わるとプレイボタンを押し、繋がられたモニタ―にコナミのロゴが映る。

「さて、流石に予選のバトルロワイヤルを流すと時間が掛かるな。どの試合を流そうか」

サマーカップ2040の本戦は先ず十六人になるまでバトルロワイヤルで間引きされる。各地の予選で勝ち残ってきた神姫たちが入り乱れて戦う様は、そえはそれで心踊るものがあるが、時間が掛かりすぎて同好会の活動としてみるのには向かないと火種は考えた。

「では会長！FUMIKOちゃんのバトルがいいと思います！」

マツシブな大の男がちゃん付けである。火種は一瞬顔をしかめ、綾乃は引き、詩織は何時もの通り困った笑顔を浮かべる。どうせ煩惱のみによる判断なのだから切つて捨てようとしたが、ふと考えてみると決して悪い選択ではないと考える。

FUMIKOが全国屈指の実力者であるのは事実であるし、所謂全国レベルのランカーが何故強いのか、分かりやすく示せる例でもあると気付いたのである。火種は、この日はFUMIKOの試合を追うことに決めた。

FUMIKOの神姫ネメアは悪魔型ストラーフである。天使型アーンヴァルと並び武装神姫黎明期の傑作機であり、本来のフルセツトは重量級ハイパワー神姫の代名詞的な存在である。強くて堅くて、そして遅いという分かりやすい神姫である。

ブルーレイに接続されたTVに映る、森に覆われた川辺の開けた土地に現れる0と1の塊、それがやがて形を為し、二つの少女を形作る。全国クラスの大会は毎回バーチャルバトル、リアルバトルが参加受付が始まる少し前に、その都度公表される。今回のサマーカップは地方予選を除き、全てバーチャルバトルで行われたのである。

モニターに映るネメアの表示されたストラーフ八全て純正パーツで構成されていた。特徴的な二本の攻撃的なサブアーム、巨大で堅牢な機械脚、そして胸部装甲。細かなアーマーはなく、ストラーフをストラーフ足らしめる最低限の組み合わせである。

対して対戦相手は兎型ヴァッフエバニー。これもネメア同様、純正パーツによるフルフェイスマスクを含めた重装仕様である。

元々その素体専用には造られた標準武装は、当然ながらその素体と相性が良い。その為初心者だけでなく、熟練者にもほぼ純正パーツという神姫は少なくない。

やがてバトル開始のアナウンスと共に動き出す。近接戦に殊の外強いストラーフと、やや万能型ながら射撃に優れたヴァッフエバニー。だが、相手にヴァッフエバニーは接近戦に自信があるのか前が出る。

先制したのはヴァッフエバニー。0と1で構成されていくアーミーナイフを左手に構え、レーザーポインター付きのハンドガンを右手に呼び出す。そして至近距離で放たれる銃弾。それをネメアはストラーフらしからぬ素早さで避ける。足のバーニア出力と方向を巧妙に調整し、ホバークラフトさながらの動きヴァッフエバニーの横に回りこんで見せた。

だがモニターに映る黒の少女は自分の動きに不満があったのか表情は厳しい。事実彼女の動きの軌道はふわりと外に広がっている。その為敵の攻撃を避けたはいいが、自身の間合いからも外れてしまっているのだ。

ネメアは両手にリボルバーを顕現させるとそれを乱射。ヴァッフエバニーもハンドガンで牽制しながら移動、川辺にあつた岩の影に逃げ込む。そしてナイフとハンドガンを消し、代わりにガトリング砲を召還する。

同時にネメアもグレネードランチャーを顕現させ、相手が隠れている岩に打ち込む。焙り出されるように跳び出たヴァツフェバニーは素早くガトリングを構えて撃ち始める。ネメアはサブアームで防御しながら

ホバーリングで森に逃げ込む。流石に重装甲のストラーフ装備である銃弾を掻き分けるのは無理だと判断したようである。

丁度ガトリングの弾倉一つ撃ち終えたところでヴァツフェバニーは更なる武装を顕現させる。現れるのは人間からすれば対戦車ロケットのような武装、シュトゥルムウントドラク。だがその際どうしても発生してしまう若干のタイムラグ。それを好機と捉えたのか森から跳び出て来るネメア。それにも動じず、素早くミサイルを構える相手。だが逆にネメアは口端を愉快そうに歪める。

『悪いけどさ、射撃も得意なんだよね、ボクさああっ！』

放たれるミサイルに照準を合わせ、ネメアはリボルバーの引き金を引く。二体の中央で爆発するロケット弾。炎と爆煙が二人を視覚的に遮断する。

ここで両者共に全く同じ行動に出た。ネメアはリボルバーを消して、ヴァツフェバニーはロケットランチャーを消し、再度同時に突っ込む。ヴァツフェバニーは両手にアーミーナイフを顕現させ、ネメアは大鎌を顕現させる。

先に間合いに入るのはネメアの大鎌。間合いに入る直前に着地し、余った勢いを乗せるように鎌を横に薙ぐ。ヴァツフェバニーは体を沈ませそれを避けると下から突き上げるようにナイフの一撃を

打ち上げる。だがそれはネメアのサブアームが放った掌底に捌かれる。

だが大鎌を振るうには近すぎるその距離からヴァッフエバニーは離れる心算はなかった。そのままの勢いで回転しながらネメアの右足を払わんと下段蹴りを放つ。だが今度はネメアが右足のバーニアを軽く吹かして足を持ち上げる。普通に動かしていたら避けられなかっただろう。

ここで相手は更にネメアの顎を狙い蹴り上げる。これをネメアは両手を交差して防ぐ。

蹴りの勢いに押され僅かに上体をそらすネメア。ここでヴァッフエバニーは再度射撃戦にもち込もうと距離を開けるべく後ろに跳ぼうとする。

『ダメだよ逃げちゃ』

咄嗟にネメアは両足を曲げ、サブアームで地面を掴む。両方のサブアームを支点に無理矢理下半身を後方に、前傾姿勢に近い体制を無理矢理作り出す。そしてヴァッフエバニーに向けて突き出される両腕。それは辛うじて届かない距離にある。僅かではあるが、決して届かない、そんな距離。

だがネメアの腕の代わりにヴァッフエバニーに届いたものがあった。ネメアの両腕から伸びる無数の0と1。やがてそれは実体となって、ヴァッフエバニーの頭をがっしりと掴み込む。



それはネメアの背中に搭載されたサブアームと同じ物。ナツクル系に分類されるクローである。

『つゝかまえたよっ、と』

底冷えするような感覚を纏う声。その言葉と共に顔面から地面に叩きつけられるヴァッフエバニー。小石だらけの地面に叩きつけられ、ダメージを受けながらもすぐさま立ち上がるうとする。だがそうする前にネメアのクローで首を掴まれ持ち上げられる。同時にサブアームも伸ばされ、ヴァッフエバニーの顔面を鷲掴む。

『うぐ、ああああああ！』

サブアームの握力によってひび割れ、0と1に還元されていくマスク。マスクがほぼ原形を留めないほど崩れ去りながらも、サブアームでその表情は見えない。だが、その苦悶は声から想像するに余りあるものだった。

そしてチヨークスラムの要領で再度地面に叩きつけられる。今度は小さいながらもクレーターが出来るほどの威力で。そして動けないでいるヴァッフエバニーに対して足を振り上げる。そして相手の頭に、タイミングよく軸足のバーニアを噴射させ、勢いに乗って蹴り飛ばす。

そして、本当に玩具のように飛んでいくヴァッフエバニー。

『勝者！HUMIKO選手、ネメアペア！』

『当然！』

勝利者として名を呼ばれ、ネメアは然も当たり前前の事であるかのような笑みを浮かべた。

試合の映像が終わり、次の試合のカードが表示された所で火種がポーズをかける。

「どうだ、参考になったか？」

火種の言葉に、苦笑いしか出ない詩織。FUMIKOちゃんの神姫は違うな、としきりに頷くだけの宗一郎。同好会内の神姫持ちの反応に溜め息を吐く火種。

「いいか。この映像のように、高いレベルのバトルでは武装のバランスや戦術だけではない。あのように体捌きが重要になってくる。それも最初からプログラムされているものではない。映像内であったような自由な動きは神姫の経験とマスターとの試行錯誤の中

からしか生まれん。これからのバトル、これらの体捌きを意識してみろ」

実際の格闘技やらの動きを研究してみるのも良いかも知れんな、と火種が続ける中、話を聞いていた綾乃はあることを思い出す。

「そう言えば会長、会長も全国にいったんですよね？結果を教えてくださいませんか？」

「そう言えばそうでしたね。あの頃は会長も機嫌が悪くて聞けませんでしたから」

綾乃の言葉に追従する浩輔。うつ、と声を詰まらせる火種。

「その……で……」

火種は恥ずかしそうに、呟くような声で答える。だが、それは他のメンバーたちには聞こえず、もう一度尋ねられる。

「く……最初のバトルロワイヤルで墜ちたわ！開始五分ももたずにな！悪いか！彩雲は軽装甲なんだよ！ランダムで現れた場所がリミタリー系わんさかで流れ弾でやられたんだよ！」

余程その記憶が屈辱だったのか、火種は怒鳴り散らす。そして墜ちた張本人である彩雲も苦い顔である。

そして半ば涙目になって肩を怒らせる火種を見て、綾乃は思った。今の会長めっちゃ可愛い、と。

第二話 「もうほんと、神姫の為なら土下座でも何でもしますから」（後書き）

本格的に猛暑に入ったらしい今日この頃、皆様如何お過ごしでしょうか？どうも、郭堯です。

今回も出ませんでした主人公のパートナー神姫。一応フラグは立たせられましたが、次回で出せるよう頑張ります。

神姫に詳しい方ならメーカーで主人公パートナーのある程度辺りが見つくと思いますが、楽しみにしていただければ幸いです。

今回は短いですが、ここまで。それでは皆様、また次回お会いしましょう。

### 第三話 「不正は見つからなければ不正ではありません」

心地良いほどに澄んだ青空に、僅かに掛かる雲。残暑も程よく過ぎ去り、屋外には秋らしい涼しい風が流れていた。

その風に乗る、黄色く染まり始めた木の葉が何枚か宙を舞う。

そんな秋の空の下、熱気に包まれた場所があった。そこはある神姫イベントが行われているイベント会場だ。

神姫業界初の二社共同開発の新型神姫。戦乙女型を銘打ったそれは、一部を除いた神姫の慣例通り、二種同時のリリースが決まっている。まさに姉妹機ともいうべき、近い設計の機体。

白き戦乙女「アルトレーネ」

黒き戦乙女「アルトアイネス」

素体はさて置き、そのアーマーはほぼ同じデザインで、色合くらいしか違いはない。素体の個性に合わせて若干調整が異なる程度である。

そんなアーマーの外見的な意味での最大の特徴は神姫で初めて採用される、クリスタルアーマーと呼ばれるクリアパーツである。

それぞれサファイアとルビーの色をしたパーツがあり、その内部に機能的な意味での特徴が納まっている。

サブアームや脚部に独立的にエネルギーを供給する為の小型コンデンサである。ここから供給されるエネルギーによって、大型に分類されるべきサイズのアーマーとしては破格の俊敏性を発揮するのである。

という事が会場の舞台上で解説されていた。

「なるほどね、でかくて速いってことか」

それを聞いていた多くの聴衆の中に、木下綾乃はいた。横には一緒に来た友人の詩織が付き添っている。

今説明されている二機が、今日の最後にプレゼントになるという予定だと、情報をくれた史貞から聞いている。その史貞はこのイベントにアームズ社側のスタッフとして参加している浅井春菜に挨拶に行くといつてこの場にはいない。昼に合流しようという事になっている。

「でもアームズ社らしくないデザインね」

そう呟く綾乃に、隣の詩織も頷く。

元々アームズ・イン・ポケット社は、リミタリー系神姫とパー

ツで業界の大手に名を連ねた会社である。そのアームズ社が関わつたにも拘らず、二機種ともメカニカルなパーツで構成されており、従来のアームズ社製とは一線を画すデザインに仕上がっている。

「八房はどう見る？あの新装備」

紹介されている新型神姫のパーツに対し、詩織は自分の神姫に意見を聞く。

「良い物かと。力ある副腕を、より速く動かし、普通の腕と同等の剣捌きを可能としているようだ。………某に合うとは思えません」

主である詩織の頭の上で胡坐をかきながら、新型神姫の装備を分析していく。大凡良い物、という認識に至ったようだが、自分で使ってみたいという認識には至らなかったようである。

尤も傍で聞いていた綾乃も、八房がメカ系コーディネートで戦う所は想像できなかった。何せ八房をよく知っている者から言わせれば、ハウリン純正装備すら似合わないと思わせる変り種のハウリンなのだ。

犬侍八房、装備は常に和風コーディネート、主に侍型紅緒の装備をリペイントした物を愛用していた。



「それにしてもよく似てる二機だよな。珍しいわ」

綾乃は改めて舞台上の新型神姫たちに目を移すと、そう呟いた。

今までの神姫ラインナップを鑑みた場合、二機種同時リリースはほぼ間逆のコンセプトの神姫が並べられるのが慣例だったからだ。対して今回の戦乙女型二機は、やはりよく似ていた。

新型神姫の紹介が終われば次はちよつとしたお祭りである。神姫イベントのお約束、神姫バトル大会である。今回はバトルロンドスタイルのリアルバトル。そのタッグバトルである。

武装神姫が、マスターからの支持や助言を受けて、自分の判断と力で戦う形式。

神姫バトルのスタンダードといえる形式で、ライドオンシステムと呼ばれる、神姫と擬似的に融合できるシステムが開発されるまで、神姫バトル唯一の戦い方だった。

そんな、少し古いスタイルだが、未だにその人気は衰えを見せていない。

そして会場の一画に設置されたリアルバトル用筐体では、その予選が始まっており、中々の盛り上がりを見せている。

そこから若干距離を置いた場所で、明智史貞は壁に背を預けていた。その隣にはビジネススーツに身を包んだ、二十歳を超えた辺りの大人の女性。史貞の知人、浅井春菜その人である。

史貞はジャケットのポケットに、春菜は肩の上にそれぞれの神姫を待機させている。

「イベントは成功ってどこ？」

「まあ、今の所はね」

知人であり、スタッフでもある春菜に対し、先ずはイベントに関する話題を振る。それに応える春菜の声には楽しげなものが混じっている。

「新規参入企業に業界初の二社合同開発。ただの新型神姫に収まらない神姫ですからね」

そう一言付け加えたのは春菜の肩に腰かけている神姫、火器型神姫ゼルノグラード、だんまり弾鞠。春菜同様、史貞にとっては長い付き合いのある相手である。

「それで、電話でも言ったけど、ごめん。あの事ばらしちゃって」

史貞の言うあの事とは当然サプライズイベントの事である。どのメディアにも伝えていない情報であり、それを勝手に外に漏らしたのだから、場合によっては問題になる。尤もその場合、まず春菜が史貞に情報を伝えたことが問題となるが。

「ああ、いいいいの。寧ろ事前に教えてもらってよかったわ。彼女の抽選番号って何番？」

「そんなの知ってどうすんの？」

「ん〜、職権乱用」

不安げな史貞の言葉に、榛名は悪戯小僧のような表情を浮かべる。権利とお金は使う為にある、というのが彼女の信条である。史貞は大きく溜め息を吐いた。

「大丈夫ですよ史貞さん。不正は見つからなければ不正ではありません。そして閣下の不正が露呈する事は、万が一にもあり得ない……あ〜」

自信満々に言う弾鞠の言葉が途中で途切れる。その様子を史貞のポケットから視界に入れていた彼の神姫は溜め息を吐く。

「そんな分かりやすいフラグ建てるから。どうする？なんかこそこそしてる神姫がいるみたいだけど」

故意なのか偶然か、アームズ社の造る素体は何故か死亡フラグを建てることに関しては、右に出るものはない。

「ああ、いいよ。どうせ証拠なんて残さないし」

目撃者の存在をどうでもいいとばかりの春菜。仮に犯罪捜査などでも録音されたデータは改竄しやすいという事で証拠能力が低いと言われているが、それでも全く意に介さないのは大胆と言わなければならない。

兎にも角にも、横にいる社会人の言葉に溜め息を吐く史貞。大凡社会人らしからぬその物言いは、永い付き合いのある春菜そのものだが、企業という名の組織に加わって少しは改善すると思っていた。結果は今の様子だが。

「所でさ、フミちゃん。実は今日は夏樹も連れて来てるんだけど」

「悪い、春菜姉さん。俺、そろそろ帰るよ」

春名の言葉を聞いた途端、その場を離れようとする史貞。だが

その肩を掴まれ、動きを止められてしまう。

「何処に行くのかな？もうちょっとバトルを見物してごうよ」

そう言って元の場所に引き戻される。

「ボス、そろそろ吹っ切れてもいいんじゃないかな？……あつ！何簡単に負けてるんだよ！それじゃストラーフが弱いみたいじゃん！」

ポケットからの声に、史貞はそちらに視線を向けるが、声の主は行われているバトルに関心を移してしまったようだ。

史貞は溜め息を吐いてバトルに目を移す。目に映るのは目を回して倒れているストラーフと、壁に刺さってじたばたしているアインヴァルらしき下半身。

そして勝者としてフィールド『ゴーストタウン』に立つマオチヤオ、蒼いハウリン。

その二体を目にした史貞は、蒼いハウリンの武装に注意を向けた。

「自作武装かな？春菜姉さん、あんな武装出してるメーカーなんて知ってる？」

武装神姫はフルセットを出しているような大手メーカーだけでなく、アーマーや武装など、パーツを専門に取り扱っている企業も少なくない。無論それらは知名度こそ低いものの、ちゃんとKONAMIと提携し、公式に認められたパーツである。

明智史貞はそれなりに神姫暦の永い部類に入るマスターである。現状出回っている神姫の正規パーツも大体頭に入っているという自信がある。

そして蒼いハウリンの纏っている装備は彼の知識の外にあった。そしてバトルに出ているのだからレギュレーションチェックはパスしている事になる。と言う事はイリーガル、つまり違法パーツと言う事は考え難い。

「見たことないわね。自作かしら。だとすればあれを造った人物は大したものね」

チェックさえ通れば、完全自作のパーツもOKなのがリアルバトルである。

そのためバーチャルバトルと比べると多彩な武装を目にする機会が多い。それが比較的費用の掛かるリアルバトルが、バーチャルバトルと互角の人気を保持している理由の一つでもある。

だがチェックの判断を下すのは人間である。レギュレーションの文章の解釈によって、その大会でOKが出た装備が他の大会でア

ウトだったりする場合もある。

蒼いハウリンの武装に多少の興味を覚えた史貞だったが、その戦いを直接目にしなかった史貞はそれ以上の興味を抱かなかった。もし直接蒼いハウリンの素体の性能を目にしていれば、或いは違う反応を見せたかもしれない。だがそれよりも、とにかく夏樹という人物に出会わないようにすることだけを考えていた。

史貞が共にやってきた女子二人と合流したのは昼時の事。

会場に入る前から事前に買っておいた一つ百円という安さが売りのハンバーガーをそれぞれ分け合い、他の客の邪魔にならない場所のでパクつく。二体の神姫は一緒になって「ねこたままん」を口にする。ケモテック社から出されている、神姫用の趣向品。猫みみたいな形の、経口摂取するお菓子のような物である。

「それでタッグバトルとツガルのコンサートかな、残りの目玉は。まあ、その後に例のアレがあるんだけど」

史貞が手元のパンフレットを見ながら、これからのイベント予定を確認する。尤も肝心の綾乃はサプライズイベントが待ち遠しいようで、今から鼻息が荒い。そんなんで残り半日もつのかと不安になり、隣にいる詩織に視線を向ける。

隣に佇む詩織は何時ものように困ったような笑みを返すだけで

ある。そう言えば彼女の表情が何かしらの笑みでない所を見たこと  
ないな、と思いながら溜め息を吐いた。

取敢えず暫くは用事がない。なので暫く時間を潰す為に、三人  
は展望ブースに移動。イベント会場をほぼ一覽できるその場は休憩  
場所として人気で、食事時は満員状態だった。

そんな場所で席を確保し、バトルブースに目を向ける詩織と史  
貞。ちなみにそれまで一番テンションが高かった綾乃はテーブルに  
突っ伏して眠っている。どうやら前日から興奮して寝付けなかつた  
らしい。席について五分もしない内に船を漕ぎ出し、そして今は口  
を半開きと言う、些か可愛らしさに欠ける寝方である。

「それにしても盛況だね。よくもここまで人が集まるもんだよ  
ね」

「お祭り好きは日本人の性だから。それに最近海外からの人  
も増えてきたみたいだし」

他のブースを回る気にもならなかった二人は、会場を見下ろし  
ながらそんな会話を楽しむ事にした。尤も楽しむというのは語弊が  
あるかも知れない。この二人は互いにそれほど親しい仲だとは思っ  
ていない。互いを理解もしていないので話題も特にならない。唯一確実  
な神姫の話題は史貞が避けている節を感じ、詩織も深く聴くことを  
しないでいる。



「ねえ、八房、貴女もバトルに出たかったかしら？」

史貞との話題が途絶えたこともあり、詩織はテーブルの上に胡坐をかいて観戦していた自分の神姫に声を掛けた。

「相方がいれば、或いは吝かでも」

特に思うところはないとも言いたげな、冷淡な口調でそう告げた。八房の本心は兎も角、彼女にパートナーがいないのは事実である。

史貞はバトルに参加しようという意識は感じられなかったし、同好会のメンバーはこの場にはいない。例えても、空中戦闘の彩雲に、高速戦闘のパプリカ。連携には比較的時間が必要そうな面子である。

「史貞殿は、バトルはなされないのです？」

そう問いかけたのは、先ほど聞かれた八房である。そこに特別な意図はなく、純粹に今までの話題の延長でしかない。だが、結果として敢えて避けていた話題に触れてしまったことを、詩織は失敗したかな、と考えた。

「ん？まあ、そうだね。今はそれなりに忙しいから」

そう言う史貞の表情は相変わらず見えないが、どこか硬質めいたものを感じた。

「返さなきゃいけない借りがあるんだ。そのうち、またやるさ」

呟きながら、史貞が顔を向けた先にはバトルブースの試合模様。そして沸きあがる歓声。どうやら優勝チームが決まったようである。

「ま、今日は俺よりこっちな訳だけど」

その言葉に詩織は、史貞のストラップにほっぺを突かれながら眠っている綾乃に向けた。

第三話 「不正は見つからなければ不正ではありません」(後書き)

暑さで仕事のとぎ頭がくらくらする今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか？どうも、郭莞です。

とうとう主人公機登場までいきませんでした。新型ゲットまでは行きたかったのですが。取敢えず最近仕事が忙しくて暑くて適いません。節電云々でクーラーが点けられないのと、使ってる機械の熱で余計に。

取敢えず次回こそ神姫起動まで行きたいと思います。

それでは今回はこの辺で、また次回お会いしましょう。

第四話 「これからボクのマスターとして頑張ってねっ」

「それで、そろそろ起こさないでいいのかな？」

「と言っかもう起きてもらわないと不味いってマジで！木下さん起きて！」

木下綾乃が眠りだしたのはタッグバトルの決勝戦、午後のイベントが始まりだした辺りからだった。

それはまあ、構わなかった。誤解を恐れない表現を使うなら、その試合は所詮他人事だ。少なくともまだ神姫を手に入れていない綾乃にとっては。

その特別バトルも、構わないだろう。空戦能力に欠ける神姫で空戦型神姫を相手取る参考にもなるうが、それは神姫を手に入れた後からでも間に合う。

ツガルのコンサートも、元より彼女にとってはおまけでしかない。綾乃も年頃の女の子らしく音楽を聴いたりするが、これもまあいいのだろう。生ライブの音量でも起きないというのは些かどうかと、付き添いの二人は考えたが。

問題はその後だった。目当てのサプライズイベント。本来運任せのの筈のイベントに希望をかけるのは人としてどうか、と言う部分はさて置いて、流石にここで眠りっぱなしは不味い。司会の男が舞台上でイベントの説明をしている内に、二人は綾乃を起こそうとした。

だが二人は思い知る。綾乃という人物は一度眠りに着くと、起こすのが困難極まりない人物だということ。

この手のくじ引きで運良く景品が当たるとは思っていない詩織は兎も角、裏事情を知っている史貞は焦りを覚える。スタッフでもある知人、春菜が何かして綾乃を当選させる腹心算なのである。実際にそれが成功するかは知らないが、自身も責任の一端があると自覚している史貞だが、綾乃に新型を手に入れさせてやればとも考えている。

流石にお年玉云々のエピソードは哀れすぎると感じていたのだ。

対して詩織の方は、本当に神姫が当たるとは思っておらず、流石に寝ている間にすべてが終わっていた、というのは悲しすぎるだろうという考えての行動である。

そんな訳でやや熱意に差があるが、綾乃を起こす為に二人は動く。

史貞が肩を揺らし、彼のストラップが相手の頬を引っ張る。だが、相手は至近距離で行われた生ライブでも起きなかつた女である。

そして時間は冒頭に。

二人と二機は更に知る事になる。眠れる綾乃の恐ろしさを。

舞台では抽選の説明が行われており、抽選までもはや間もないのだろう。このままでは抽選結果を操作したのに神姫を手に入れ損ねるといふ至極間抜けな未来が訪れてしまう。

「木下さん、そろそろマジで起きて。もう抽選が始まりそおふっ！」

本気で不味いと感じ、肩をゆるする力を強めた史貞。だがそれを不快と感じたか、寝惚けているらしい綾乃の肘が一闪、男にしてはやや小柄な彼の下っ腹にめり込む。

「ボ、ボス！？ちよつと、お前何をぶぎゅっ！」

さらには抗議の声を挙げようとした小さな友人を、枕にした腕の位置を調整するついでに相手を下敷きにして見せた。

史貞は下っ腹を押さえて蹲り、綾乃の腕の下からは小さな下半身が両足をジタバタさせている。

寝惚け綾乃、綾乃を起こし隊半数を撃破。尚、史貞は後に語る。もし自分の足がもう少し長ければ大変な事になっていたと。

「えと、明智君、大丈夫？」

「あんまダイジヨブじゃない」

史貞は腹を押さえながら何とか立ち上がる。既に下の舞台では賞品となる二機の神姫が、パッケージングされた物が紹介されている。いよいよ時間がなくなってきた。

『それでは先ずは白き戦乙女、アルトレーネからです。それはスロットスタートです!』

司会の男性の声に合わせて、大型モニターに数字のスロットが映し出され、回転を始める。

「前田さん、取り合えず木下さんの番号だけでも」

腹を押さえながらも史貞はそう伝えた。

確かに、綾乃の番号を確認しなければ、せっかく当たっても意味がない。仕方ないと、詩織は綾乃の鞆を漁る。それとほぼ同時に最初の抽選結果が発表される。

『アルトレーネの当選者は038番のカードをお持ちのお客様です!』

急いで取り出した綾乃のカード番号は107番、当たりではなかった。確率的にそれが当然だと思う反面、残念だとも、詩織は思った。

『それでは受賞者の方は壇上にお上がり下さい』

舞台ではイベントが進み、受賞者にパッケージングされたアルトレーネが手渡される。だが色んな意味でパニツクな彼らにそれを気にする余裕はない。

『ではアルトレーネ当選のお客様にはお待ちいただいて、アルトアイネスの抽選に入ります』

そして発表される当選番号、107。

「当たっちゃった!？」

思わず声を挙げる詩織。当然そうなる事を知っていた史貞は舌打ちした。先に当選した方の客に新型を渡してくればそれだけでもちよつとは時間稼ぎになるのに、と。



『107番のお客様、107番のお客様はいらっしゃいませんか？』

響く司会者の声。もしこのまま放置していれば、違う人に新型が渡されることになるだろう。

「ああもう、恨むよ木下さん！前田さん、俺が木下さん負ぶつてくから司会の人呼び止めて！」

絶対目立つだろうな、と。致し方なく、綾乃のカードを手に舞台へと駆けていく詩織。

「今度は肘とばすなよ」

女の子を勝手に触るということに罪悪感を感じるが、そんなことを言っている場合でもなかった。

兎に角そつと綾乃の体を背負い込む。その際、未だジタバタしている自分の神姫を救出する事も忘れない。呼吸こそ必要ないが、精神的な疲労でぐったりしてしまった相棒を定位置であるジャケットのポケットで休ませながら、史貞も舞台に足を向ける。

決して重い方ではないが、それでも小柄な史貞にはそれなりの負担である。故に、

「おもっ」

だから史貞が思わずそう呟いても、許されていいことなのだろう。もっとも寝惚けてる綾乃にそんな事は関係ない。

「おもいつてなにがだ〜」

女としての本能のようなものだろうか、綾乃はその言葉に反応して史貞の米神に拳を押し当てる。尤も相変わらず寝惚けているのだらう、その動きや雰囲気は酔っ払いのそれにも見えなくはない。

痛いながらも、史貞とて自分がいった言葉の意味は理解している。それもあり、史貞は抗議の声を挙げる事もせず、兎に角舞台に向かう事を優先した。

「明智さん、早くっ」

周りから感じる視線にうんざりしながら舞台に駆け上がったいく史貞。多少の視線に気後れする事はないが、意図しないそれは気持ちのいいものではない。

「はいはい、今っ」

人ごみを無理矢理割いていつて舞台上上がる。彼の背中の綾乃は尚も眠り続けている。

『ええ、予想外な出来事も起きていますが、当選者が出揃いましたので、景品の受け渡しを始めたいと思います』

当選者が寝ながら他人に背負われてくるという、アクセシデントと言えなくもない出来事に多少の動揺を見せる。だがイベントの進行に影響与えないようにすぐに動揺を押し殺す。そして何事もなかったかのように言葉を紡いでいく。

その言葉に促され、舞台上上がり漸く史貞はもう一人の当選者に気付く。

頂で束ねた黒い長髪、青く染めた前髪。強気そうな印象を与える、細い吊り目。そしてやや大人な印象を与える肢体。

「何やってんのよ、あんた」

彼女の名は浅井あさい 夏樹なつき、春菜の妹であり、史貞としては色々と因縁のある相手だった。その相手から思いつきり呆れ果てた視線を向けられる。その視線に色々な意味で気まずい気分になった史貞だが、神姫の入ったパッケージを持って来るスタッフが視界に入り、大人しく引き下がる。

「知り合いですか、明智さん？」

先に舞台上がり、スタッフに事情を説明した詩織が史貞の横にやってきて小声で尋ねる。

「うん、まあ。夏樹っていう、春菜姉さんの妹」

詩織は春菜と直接の面識はないが、史貞の話は聞いたことがあった。だから一応は春菜のことを多少は知っている。その春菜に妹がいるというのは、詩織は初めて聞いた。話に出てきたことがないから多分綾乃も知らないのかな、とも。

史貞が知っている限り、夏樹と呼ばれた少女が神姫にそれほど興味を持っていなかったと思っている。だからか、神姫の入った箱を受け取る彼女の笑顔が作り笑いだとすぐに気付いた。尤も、だからといって史貞にとって何かするべきこともなければ、出来ることもない。

多分春菜姉さんが何か企んでんだろうな、と心中零すに留まった。

「それでは次は黒き戦乙女、アルトアイネスの当選者へ……代わりに受け取ってもらえますか？」

史貞が舞台上上がる前に、詩織から事情を聞いていた司会者は取り合えず付き添いの二人に新型を預かってもらう事にしたようである。

こうして綾乃は自分の神姫を手に入れたのである。本人の気が付かぬ内に、周りから微笑ましいものを見る視線に包まれながら。

「納得いかないな、やっぱり」

同好会で使われている空き教室。パッケージから取り出されたアルトアイネスの胸にCSCを嵌め込んでいく綾乃。

「ぶつくさ言つな。聞いた分には完全にお前が悪い」

その横でクレイドルと接続されたノートPCを弄る火種。空き教室には他の会員も揃っている。

寝ている内に神姫を手に入れて次の日の放課後。神姫を手に入れた際の喜びを味わえなかった不満を抱えつつ、綾乃は神姫を起動させるため何時もの空き教室に来ていた。

「そんなことより木下の娘っ子、新しい仲間が目覚めるんだろ？もう名前は考えてやったのか？」

火種の横に控えている大男、宗一郎の神姫、パプリカが声を掛ける。

「あゝ、一応ね。まだちょっと悩んでるけど、せつかく戦乙女なんだからそつから抜ろうかなって」

答える綾乃の目線の先には、机に置かれた一冊の本。古エツダと題されるその本にはケルト神話に登場する数ある戦乙女の名が記されている。昼休みに図書室で借りてきて、短い時間だが調べてみたのだ。

「初めての神姫だ。一生もののパートナーになるかも知れんかな。よく考えて決めたほうが良いぞ。人間の名前と違って変えられんのだからな」

神姫の起動準備を手伝っている火種の言葉。それは事実であり、一度登録された名前はオーナーと同じく、メモリーをリセットしない限り変更はきかない。

「名は某共神姫が最初に主より賜るものです。考えて考えすぎと言つ事はないでしょう」

横で見守る詩織の肩の上、八房は火種の言葉に続く。この場に  
いる他の神姫もその言葉に頷く。綾乃としてもそれは理解している  
心算なので異論を挟む事はしなかった。

「よし、こっちの準備は出来たぞ。そちらの準備が終わればク  
レイドルに神姫をセットしてくれ。それで始められる」

「あ、了解です」

ノートPCを弄っていた火種は、セッティングを終えた事を綾  
乃に伝え、向き直る。既にCSCのセットを終えていた綾乃は、ク  
レイドルに彼女の手に入れた神姫、アルトアイネスの素体をセット  
する。

「こっちもOKです」

綾乃の返事を確認し、火種はノートPCを操作していく。少々  
の操作の後、クレイドルにセットされたアルトアイネスから起動音  
が発せられる。

「デイオーネ・コーポレーション製、MMSオートマトン神姫、  
戦乙女型アルトアイネス、DI/AIIP-001X2、セットアッ

「ブ完了、起動します」

そして目を開き、立ち上がる。その表情には感情はなく、ただ機械としてのみ存在している。その様子を、綾乃は喉を鳴らし、他は静かに見守る。

「オーナーの事は何とお呼びすればよろしいでしょうか？」

目の前にいる綾乃に向けられる無機質な視線。綾乃は緊張した面持ちで起動した神姫に答えていく。

「えと、普通にマスターでいいかな」

オーナーの呼称の登録。このプロセスを経て、初めて神姫は心を持つ。

「じゃあ、マスターって呼んであげる。これからボクのマスターとして頑張ってる」

先ほどまでの機械的な応答ではなく、まるで本当に心を持った人間のような受け答え。その様子に綾乃は頬を綻ばせる。



「うん、よろしく。それで君の名前なんだけどね」

これからの苦楽を共にする小さなパートナー。木下 綾乃がそんな彼女にあげた名前は……

「へリヤ、戦乙女の中で一番かっこいいのを選んだよ」

黒の戦乙女、へリヤ。彼女と共に、新たに戦いの舞台への権利を手にした少女。彼女たちが如何なる楽曲を紡ぐのか。

何はともあれ、この舞台にまた一つ音が加えられたのは確かだった。

第四話 「これからボクのマスターとして頑張ってねっ」(後書き)

後書き

夏もそろそろ終わる今日この頃、皆様如何お過ごしでしょうか？  
どうも、郭堯です。

漸く出せました、主人公のパートナー神姫。ここまでが長かったです。主人公に関して殆ど何も考えずに始めてしまったこの作品も終りにここまで来ました。いや、始まったばかりなんです。

ここまで基本ストーリーが人間同士のやり取りがメインでしたが、次回から神姫との絡みも増えていく予定です。そしてこの手の作品に於ける王道的イベントも予定していますのでご期待を。

それでは今回はこの辺で。また次回お会いしましょう。

## 第五話

「初めてのバトルだからって、負けたいとは思ってないんだ、ボク」

風が草薙ぐ一面の草原。視界を遮るものがないそこは美しく、のどかな緑の海のようにもあつた。涼やかな風がそよぐその光景を、二つの影が躍っていた。

閃く刃の一閃。緑の陣羽織を纏った黒髪の神姫は踊るように十字槍を振るう。流れるように振るわれた一薙ぎは、ぶ厚い紅水晶の刃に防がれる。

「ふむ、良きかな。大した速さだ。最新型、伊達ではないか」

槍を振るうのはハウリン型神姫、八房。深緑にリペイントされた紅緒装備の軽装を纏っている、他の神姫の純正装備という珍しい装備を纏っている。

「そんな余裕绰々で言われるとすっごいムカつくんだけどっ、  
ねっ!」

八房のものと比べると若干子供に聞こえる少女の声。同時に動き出す紅水晶が十字槍の刃を撥ね退ける。

声の主は戦乙女型神姫、アルトアイネスがヘリヤ。紫色の髪、幼い容姿、平均的な神姫より一回り小柄な素体などの特徴を持つ、最新型神姫である。

「いや、これでも素直に驚いている。感情を表に出すのは考えを読まれて嫌なのでな、可能な限り表に出さないよう心がけているに過ぎない」

八房は相手の力に逆らわず、押されるがままに距離を開ける。

「そのような大型装備なのだ。そこまで敏捷な動きが可能だということには素直に驚いているさ」

八房の無感情な声が示す通り、純正アルトアイネス装備を纏うヘリヤは大型の神姫だった。

やや小柄な素体の身長を押し上げる大型脚部ユニット、背部から展開されるサブアームユニットとスカート状の装甲、そして黒い兜。機械的なシルエットと、紅いクリスタルパーツに彩られた漆黒の機械甲冑。とすれば大型神姫の先駆け、ストラーフにも匹敵せんと云わんばかりのサイズと重量感である。

にも拘らずその動きは軽快そのもの。それこそ俗に言う回避型

神姫と比べても遜色がないほどに。

「尤も、致し方ないことではあるが、技量は未熟。速くも単調、読むに易し」

そう言って再度振るわれたヘリヤの刃を十字槍で絡めて逸らす。真紅のクリアパーツの刃で刀身を構成された剣、ロッターシユテルンを弾き飛ばされそうになりながらも、何とか耐えるヘリヤ。

「そうですかっ！そう言うあんたは新人相手にもっと上手くやれないの、アンティークさん！」

苛立っているのを隠そうとしないヘリヤはロッターシユテルンを消し、新たに紅水晶の大剣ジークムントを召喚する。完全に実体化を終えずにまだ0と1のエフェクト混じりの状態のそれを、背中から伸びるサブアームで掴み振り下ろすモーションに移る。ヘリヤは実戦経験こそ不足しているが、自信のスペックは正確にインプットされている。己のモーションのスピードと、武装の実体化に掛かる時間を正確に把握した上での攻撃であった。

「うぬっ、よくそんなデカブツをその速さで震えるものだ。だが、その分他の機種のサブアームよりパワーで劣るな」

呻きながらも攻撃を受け流してみせる八房。彼女が心中比較対

象にしたのはストラーフやグリップラップなどといったとしたサブ  
アーム持ちの神姫たちであった。

そのいずれもパワーで相手を圧倒することを目指した機体であ  
り、そもそもアルトアイネスとはコンセプトが違うのだが、サブア  
ーム持ちと言う共通点からその名を挙げたのである。

八房は大剣の一振りを流しきると後方に跳躍。同時に槍から右  
手を離し、古風な火縄銃を顕現させヘリヤへと向ける。

「あんなノロマたちと一緒にされたら困るよ。あんなトロさで  
どうやって相手に近づくのさ！」

だがヘリヤは前に身を沈め、跳躍の体勢をとる。

「ノインテーター、フリーゲルモード！」

そしてヘリヤの言葉に合わせスカートアーマーが展開、背中ま  
で移動し黒き鋼の翼となる。アルトレーネとの共通の機能であり、  
彼女達の高起動形態である。

フリーゲルモードへと姿を変えたヘリヤは一気に火縄銃の間  
合いの内側、長物では戦えない相手の懐へと辿りつく。

「ぬっ!?!」

完全に虚を突かれた形になった八房は思わず呻くような声を上げる。右手に火縄銃、左手に十字槍。どちらも十分な間合いをとって初めて意味のある武器であり、今の距離に対応する事は不可能。

「見事！だがっ！」

思わず賞賛の声を上げる八房。だが、だからと言って大人しく相手の攻撃を受ける心算は微塵もなかった。役に立たない両手の武器を放り捨て、左腰の小太刀に手を伸ばす。捨てた武器が二進法で分解され、同時に鞘に納まっている小太刀の周辺に溢れる0と1。

神姫の武器以外の装備はアセンブルと呼ばれる。鎧や装飾品がそれに当たる。ヴァーチャルバトルにおいてそれは武装と別に登録されることになるが一部例外がある。アセンブルと武装、同時に登録することで召喚のタイムラグを減らせる武装が存在するのである。

そんな武装である小太刀で柄を紅水晶の刀身に叩きつける。それで僅かに大剣の速度を落として受ける。

弾かれて吹き飛ぶ八房。だが必殺の意図を持って振るった一撃に対応されたヘリヤも舌打ちする。

「いや、油断した。某も未熟か」

腹を押さえながら立ち上がる八房。抜き放って防御に使った小太刀は碎けて消えていく。それを見て引き攣った笑いを浮かべることができなかった。一撃で武器の耐久値を越えられた、と。

「いや、反省は後に。さあ、続けよう」

八房は再び十字槍を呼び出し上段に構える。

「言われなくても、やらせてもらおうよ」

翼と化した装甲をスカート状態に戻して大剣をサブアームで構え直す。機動力こそ下がるが、下半身を万全に防御するこの状態の方が、腰を据えた一騎打ちでは向いているとヘリヤは判断したのである。

左半身を前に、ヘリヤは剣を隠すように下段に構える。

「初めてのバトルだからって、負けたいとは思ってないんだ、ボク」

「某も新人相手とは言え、華を譲る心算は微塵もないのでな」

互いの言葉に、頬を歪ませる二人。その表情は何処までも楽し



げであった。

「ぶっ……」

「いざー！」

腰を落とし、同時に踏み出す。

「……つたぎるよ！」

「参る！」

先に大きく動いたのはヘリヤ。脚部パーツの裏のバーニアを吹かして跳躍。位置エネルギーを上乘せして大剣を振り下ろす。対して八房は咄嗟に一步下がって槍を地面に立てる。十字槍の枝に引っかけ、大剣の動きを阻む。

「小細工！」

止められた一撃、だがそこから踏み込みと共に腰を落とす。上手い具合に大剣に体重が掛かり、槍を押し折るように押し込まれていく。だが、僅かに生まれた隙は巻き返せない。

「それは……」

その僅かな隙を作り出した八房は左腰に装備した日本刀に手を添え一歩前へ。完全に大剣の間合いの内側に潜り込む。

「勇み足だ」

疾風一閃。

鯉口を切り、抜き放たれる日本刀。閃光と共に0と1を撒き散らし、斬撃は黒き戦乙女を薙いだ。

「正直な、ここまで期待していなかった」

神姫バトルを終え、自分たちの神姫を連れて合流してきた二人と二体に、火種はそんな言葉を投げかけた。

むっ、不服そうな表情を見せるヘリヤ。その主である綾乃は初の神姫バトルの興奮で火種の言葉は耳に入らなかったようで、隣の

詩織との話に夢中になっている。

「そうむくれるな。綾乃、少し聞きたいんだが」

「え、あ、はい」

突然名前を呼ばれて面食らう綾乃。火種は何か企んでいるかのような、黒い笑顔を浮かべている。

「冬の大会、チーム戦、お前もエントリーしろ」

「いきなり大会ですか！あれ確か二ヶ月ないですよね!？」

いきなりの命令に驚く綾乃。確かに神姫を手に入れたからには、いづれ何かしらの大会やらイベントやらに参加する心算はあった。だがいきなり全国レベルのメジャー大会の一角と言うのは考えていなかったのである。

「何、今回のバトルを見ればな。一ヶ月でそれなりに使えるように鍛えてやる、安心しろ」

「いえ、そう言われてもですね、うちの子の性能は大したもん

かも知れませんが、私の方は完全に素人ですよ？」

当惑する綾乃の様子が面白いのか、火種はクツクツと喉を鳴らす。

「安心しろ。人は誰でも最初は素人だ。それにお前が強くなる協力はしてやる。まずはお前がヘリヤに指示が出せるようになる為に必要なものは彼女の性能に対する理解だ。さあ、次は私と彩雲が相手をしよう」

自身の神姫を理解せずして神姫バトルの勝利は有り得ない。それは神姫バトルをする者にとっては鉄則である。今回の戦いでヘリヤが八房と互角の戦いが出来たのは、八房のマスターたる詩織が一切の指示を出さないのと、ルール設定でパラメーター減退というハズレ有つてのものだった。

「そうだね。綾乃と一緒に大会出れたら嬉しいな。八房もそうだよな？」

「は、仲間と共に戦場に立つというのも、楽しきものです」

笑顔で自身の思いの丈を吐き出す詩織と、何時の間にかヘリヤを仲間と認めている八房。二人の言葉が綾乃の退路を見事に断ち切った。

「ほれ、仲間がこう言っているんだ。彩雲、準備しろ」

「はい、姫様。只今」

弾んだ声で下された命令に、火種の鞆の上に腰かけていた彩雲が立ち上がる。それを見て綾乃は諦めの視線をヘリヤに向ける。

「よし、僕の戦いっぷりをしっかり見ててね、マスター。今のボクとマスター、どっちも経験が足りてないんだから。それさえ克服できれば最新型のボクがそうそう負けるはずがないんだから」

どっちらこっちもやる気満々のようである。

「はいはい、分かりました、付き合いますよ。ほんと会長は人の都合を考えてくれないんですから」

結局はこの日は立て続けにバトルで全敗を喫した。結果綾乃は精神的にも財布的にもボロボロにされるのだった。

結局特訓と称した連続バトルから解放されたのは、日が傾きだしてからだった。

「それにしてもどうにかなんないかな、周りの目は」

疲れた声色で呟く綾乃。この日何度かのバトルで、ある程度ヘリヤの性能を把握し出した綾乃は、決して的確とは言い難いものの多少の指示を出せるようになり始めていた。

「それは仕方あるまいよ。何せ現状市販されていない神姫だぞ？お前のアルトアイネスは」

隣で応えるたのは、何度も綾乃に経験と敗北をセットでプレゼントし続けた織田火種である。その横では詩織が何時も道理の笑顔を浮かべて、一緒に歩いている。

「まあ、ディオオーネの方が幾つか新型の先行販売やプレゼント関連のイベントを発表している。それでも最悪正式に発売されれば、な」

要は数が出回るまでは、衆目は離れないだろう、とも取れる。それが直接戦い続けてきた神姫たち以上の疲労感を煽る。尚、彼女たちの神姫たちは、戦いの電力消費もあり、それぞれの鞆の中で眠っている。

「それはそうと会長、冬の大会に参加するって言ってますけどメンバーはどうするんですか？うちのメンバーじゃ神姫足りないですよ？」

どうにもならない事は仕方がないと、綾乃は話を変える事にした。これを思考の切り替えと見るか現実逃避と見るかは、人によりけりか。

「そこは外から助っ人を頼むしかないだろうな。浩輔が神姫を買ったというのが理想的なのだが、流石に値段が値段だからな」

その言葉に、綾乃は少々げんなりする。

値段。

それは綾乃の神姫獲得を、堅固な壁となつて阻み続け、終ぞ破ることが適わなかつた障害である。綾乃は確かに神姫を手に入れたが、半ば裏技……と言ふより本人は知らない事だが完全にアウトな方法で手に入れているのである。

「柴田やお前たちにもう一機買えというのも酷であるし、私も彩雲以外の神姫を育てる心算もないからな」

火種の言葉の前半に頷くも、後半部分で「ん？」と疑問符が出てくる綾乃。買えないのではなく、買わないといったのか、会長は

これはブルジョワジー発言と取って妬みの怨念電波を飛ばして良いのか思案に走る綾乃。

「それはそうと、お前たちのクラスに来た転校生はどうなんだ？神姫マスターなのだろう？」

ふと思いついた、以前聞いた話題を出してみた。実力のほどは分からないが、うまくメンバーが集まる保障はない現状、数合わせ程度でも欲しいというのが火種の本音だった。

「ん〜、どうでしょう？バトルしたところ見たことないですし、そういう話を聞いたも……そう言えないですね」

言われて違和感に気が付いた綾乃。史貞は会話で神姫バトルについて殆ど何も話さない。不自然といえば不自然である。神姫を仕事のパートナーなどとして割り切り、バトルをしないオーナーもいるのは事実だが、彼女達の歳でそれは余り聞かない。

「ふむ、まあ無理強いはする心算はないが、話くらいはしてみるかな」



「あんまり期待できそうな雰囲気じゃない気がしますけど、  
— 応聞いてみますか」

当面の目標を与えられた綾乃とヘリヤ。

綾乃には少なくない不安と、その奥に隠れた期待が。

ヘリヤには強い自尊と、自分たちへの若干の焦燥が。

それぞれの心中を読み取った火種は、二人の成長に期待を込め  
ながら、助っ人の獲得に頭を巡らせ続けた。

## 第五話

「初めてのバトルだからって、負けたいとは思ってないんだ、ボク」

### 後書き

漸く秋らしい気温になってきているみたいな今日この頃、皆様如何お過ごしでしょうか？どうも、郭堯です。

メインどころの初戦闘でしたがどうでしょうか？自分はどうにも戦闘があっさり風味になるようで、以前別作品でご意見頂いたことがあるのですが、今回は上手くやれたのか、と。

今回はこの作品の当面の目標を出せました。この大会を目指して頑張っていくマスターと神姫たちのストーリーをお届けして行きたいと思います。

それでは今回はこの辺で、また次回お会いしましょう。

第六話 「どんだけ『ニールング』好きなんだよあのオッサン」

イリーガル神姫、と呼ばれる神姫たちが存在する。正規のレギュレーションを外れた改造を施された神姫たちである。

或いは規定以上のパワーを発揮するパーツを。或いはバトル筐体へ送るデータを改竄するアプリケーションを。

様々な方法が用いられ、時には改造された神姫自身にも危害をもたらす場合もある。

そんなイリーガル神姫、当然公式のバトルには参加が禁じられている。遣り様によつては理不尽なまでの強さを発揮するが、或いはオーナーや周囲の人間に危害を与える可能性すらある存在を企業側は許す訳にはいかないのである。

そんな表舞台に立つことを許されないイリーガル神姫であるが、それでも強さを求め違法改造を施すマスターは少なくない。たとえばルールを破ろうと、他者より優れているという虚栄を、栄光と勘違いして追い求める人間はいるのである。

だが所詮は違法改造による力。公式のバトルどころか、真つ当な筐体でサーチされれば途端に警報と共に係員がやってきて没収である。日のあたる場所に、彼女達の居場所はない。

そんなイリーガル神姫の活躍の場そのものが存在しない訳ではない。

アンダーグラウンドの賭けバトル。当然違法であるそのバトルに真つ当なレギュレーションが存在する訳もない。

東京の港町の、とある劇場。その地下にも、違法な賭けバトルのための会場でもあった。

中規模程度の演劇用の舞台の上に設置された大型リアルバトル筐体。その奥にはスクリーンが下ろされ、映画のようにリアルタイムでバトル内容が放映される。

映し出されているのはストラーフ型神姫と、グラップラップ型神姫。

ストラーフ型はほぼ標準装備。それどころか無駄なアセンブルは装着せず、ストラーフをストラーフたらしめる必要最低限の装備背中にサブアームと同じ腕をラックで接続していることだけが違っていた。

グラップラップ型は明らかに市販品でないことが分かる大型の重装備。シヨベルカーのシヨベルのようなサブアームに、両腕パーツはゴリラのそれのようですらある。その巨体を支える両足も、サブアームの繋がった背部ユニットから油圧ポンプが繋がり、パワーアシストを行っている。

一方筐体の左右の椅子に腰かける男女。両方とも顔の上半分を覆うバイザー状の機械を装着している。バトル経験者なら何度も目

にしたことがあるだろう、バトルマスターズの簡易ユニットである。

神姫とマスターが一つとなって戦う、比較的新しいバトル形態である。

「おらおら、どうしたストラーフ！ここまで無改造で勝ち上がってきた実力は見せてくれねえのかよ！」

画面の中の戦いは、傍目からは一方的に映るものだった。ハイパワーで知られるストラーフのサブアームを掴み、それこそ玩具のように振り回していく。コロシアムの壁や地面に叩きつけ、弄ぶように翺っていく。

既にゴリラのような腕につかまれている右のサブアームの装甲は、掴まれている位置から砕け始めている。

「表でいくら慣らしたからってな、ここじゃ通じねえんだよ！  
全国ランカーさんよ！」

ダメージで表情の歪むストラーフに、グラップラップは優越感を滲ませた笑みを浮かべる。それは公式大会のレギュレーションに添った武装でアンダーグラウンドに手を出した愚か者への嘲りだった。

グラップラップは傷付いたストラーフの腕を掴んだまま、眼の高さまで持ち上げる。このグラップラップにも、体を共有している

マスターにも最早戦っているという認識はない。戦いにならないほどの圧倒的な性能差を実感しているからである。だが、それは油断以外の何者でもない。

何故ならストライフとそのマスターの闘志は潰えていないのだから。

「そういう事はさ、終わってから言うことなんだよね！」

ストライフは自由な右手でグリップラップの頭を掴み、体全体をぶつけるような形で膝を叩き込んだ。十分に体重を掛けられる体制ではなかったが、それでも十分な質量を持ったストライフのソレである。グリップラップをよろめかせる程度の威力はあった。

よろめくグリップラップに対し、今度は足の裏を突きつけてバニアを吹かす。掴まれている右のサブアームが完全にもぎ取られてしまうが、敵の手から逃れることに成功、距離を離す。

「性能は認めるけど、それだけだぜ、あんた」

ストライフの口から出た、先ほどとは違う口調の言葉。それはストライフの口を通し、ストライフの声で語られた、ストライフのマスターの言葉である。

「このアタシサマが」

「このボクが」

二回に分けて口にされる、「自分」を示す言葉。

「アンタに神姫バトルを教えてやるよ」

「ふざけんな！くたばり損ないが！」

ストラーフの挑発に、激高するグラップラップ。それはそのマスターも同様であり、心情の同調は、バトルマスターズに於いて、神姫の性能を超えたパフォーマンスを引き出す。

尤も、怒りで動きが単調になつてはその利点は活かせない。

巨体を唸らせ突進してくるクラップラップを、足底のバーニアでホバーリングする独特の軌道でサイドに回りこむ。

「先ずは一発、どてっ腹に！」

腰を落とし、前傾姿勢をとる。そして全身のバネとバーニアを吹かして、相手の腰にサブアームの肩アーマーからぶつかっていく。

体重と勢いを合わせて、肩口からぶつかっていくタツクル、スピアー。

重量級神姫の全体重を掛けた一撃は、如何なマシンパワーを強化された神姫でも耐え得るものではない。くの字に折れ曲がり、地面に倒されるクラップラップ。

「関節のモーター、素体に影響出るギリギリのラインに抑えているのはいいんだけど、体の使い方がなっていないよ」

見た目のダメージはサブアームを片方失ったストラーフの方が大きいのは明らかである。だがその表情には明らかな余裕。

「一発入れたからっていい気に……うごっ!？」

何時の間にか背にセットしていたナックル武装に分類されるアームを装着し、立ち上がるグラップラップのグラップラップの頭を掴む。そしてバーニアを吹かして後方に引っ張るように跳ぶ。

立ち上がるための、前のめり気味の姿勢では如何にパワーがあるろうと意味がない。

X - ファクター。

相手の体重のみならず、自身の体重さえ運動エネルギーへと変換され、ストラーフの尻餅のついでとばかりに顔面を地面に叩きつ



けられる。

「弱点分かり易すぎるんだよね、これ」

そしてストラーフはうつ伏せに倒れこんだ相手の右のサブアームと、その油圧ポンプのシリンダー部分の間に、折られた右腕を拾い上げて差し込んだ。

「そんじゃ一本もらうよ」

手のひらが奥の方まで入り込んだのを確認して、ストラーフはこの原理を利用してサブアームを押し上げた。

ぐにやり、と変形するシリンダー。ストラーフのサブアームの指も全壊するが、所詮は取れた腕である。対してグリップラップは右のサブアームの肘関節がいかれる。

「ふ、ふざけんな！」

だが完全に動かなくなつた訳ではないと、グリップラップは背に繋がるサブアームを、第一関節で振り回す。結果至近距離で一撃を受けてしまうストラーフ。

ストラーフは背中から倒れこみ、土煙を巻き上げながら地を滑

る。

「わっおっ、反則でしょこれ。いや、反則なんだけどさ」

起き上がったストラーフは自分の胸部アーマーを見て、思わず呟いた。只の一撃でアーマーに裂傷が出来ている。まともに喰らったらその時点でアウトになりかねない。

リアパーツの肩甲骨に相当する部分を器用に使い、ストラーフは素早く跳ね起きる。だが既に敵も起き上がっており、アドバンテージを得る事はできなかった。

「虚仮にしゃがって、完全にスクラップにしてやる」

怒髪天のクラップラップの様子に、ストラーフを通してそのマスターが苦笑いを浮かべる。

「サドンデスは勘弁だわ、マジで」

いくら相手の技量が未熟でも、一撃でゲームオーバーが有り得る威力はやはり脅威である。

「ネメア、こっからはアタシがメインでいく」

ストラーフのマスターは、自身の神姫の口を借りて、確かにこう呼んだ。ネメアと。

そして突進してくるクラップラップ。ネメアと呼ばれたストラーフは緊張に引き攣った笑みを浮かべながら腰を落とし、装着している拡張腕を広げて構える。

そして振るわれるグラップラップのサブアーム。ネメアはそれを前に踏み出ること回避してみせた。

「とつた！」

そしてグラップラップの左腕を取り、相手の勢いを利用し、回転に巻き込むように引きずり倒す。

「なん!?!」

「これももらいだ」

そしてベキリ、と。倒れこむ勢いを利用しネメアが相手の左腕に体を被せ、強い負荷を掛けた。結果見事に相手の肘と肩を破壊して見せたのである。外観は繋がっていても、最早そのフレームに関するモーターパワーに耐え得る強度はない。最低限その機能を喪失



そしてネメアはリアパーツをパージ。素早く両腕で体を後ろに移動させ、倒れたままのグラップラップの背後を取る。

「じゃ、サレンダーし易くしてやるからな」

ネメアは相手の左足首を胸に抱え持ち、ベキリとへしり取った。

結果としてバトルはネメアが制した。左足を失い、左腕も機能停止。更には武器となるサブアームも昨日を著しく損ない、逆転の望みを保てなくなったのだ。

その左足と同時に、文字通り粉碎して見せたのだ。

その後、観衆の『壊せ、壊せ』とコールを、あざ笑うかのようなジェスチャーで見事なブライニングに変えたマスターと共に舞台袖に引っ込んだ。

「……危なかったね、ボス」

「……そうね、上手く畳み掛けれたから圧勝っぽくなったけど」

控え室として貸し与えられている楽屋に戻った途端、同時に溜め息を吐き、胸を撫で下ろす主従。

ネメアは、罅割れた胸部アーマーに視線を向け、次いで自分と同じように緊張から解放された主に目を向ける。

ショートカットの黒髪に、気の強さを匂わすつり気味の目尻。十四、五歳ほどの風貌に、女性としては標準的な背丈。にも拘らずやたらと控えめな胸。

眺めの前髪はヘアバンド変わりの黄色いバンダナで纏め上げられ、黒いレザージャケットにタンクトップ、スポーツブラのようなへそ出しタンクトップ、タイトなショートパンツと言う出で立ち。

元人気インディーズバンド『トウナイト』のボーカルにして、夏の大会で準優勝を飾ったFUMIKOその人だった。

人前では何時も溢れる自信と肉食獣の如き獰猛さを湛えた笑みを浮かべるその顔は、緊張から開放された反動か、些か気の抜けたものとなっている。

「それにしても痛い出費になるわ。あそこまで壊されると直せる気がしない」

FUMIKOの手にはネメアの使っていた武素パーツ。リアパ

ーツはあちこち破壊され、内側のダメージも酷い。さらに脚部パーツの足首も。脚部のバーニアを多用する擬似ホバーリングは、その細かい拳動も相まって足首に大きな負担を掛ける。日頃のバトルで蓄積したダメージに、そろそろパーツ交換でも無理な頃合かも知れなかった。

「やっぱ、買いなおすしかないんじゃない？ボス」

さつきとは意味合いの違う溜め息を吐く二人。神姫関連商品に、安いものなしなのである。

そんな時、楽屋のドアをノックする音。ここで二人を訪ねる知人は殆どいない。よって来たのはこの裏バトルのスタッフだろうと当たりをつけた。

「どうも、失礼します。エージェント12（トウエルブ）です」

脳天気そうな声と共に入ってきたのは、深い紺のスーツに身を包んだセミロングの女性だった。その顔の上半分がサングラスで隠されている為、容貌は余りよく分からないが、スーツの下の豊かなボディは目を引くものだった。

エージェント、と本人は名乗ったが、それは別にどこかの工作員という意味ではない。この裏バトルのスタッフが、そういう呼称を使っているに過ぎない。

「何の用だよ急に。こっちは装備新調の事で気が滅入ってんだよ」

これから掛かるだろう金額にやるせない気分のFUMIKO。

「それだったらいい加減ファイトマネー受け取ってくださいばいいんですよ。もう五十万以上溜まっているんですから」

「お前らみたいなのから金受け取ったら表に出れなくなりそうだからいい」

裏バトルの試合は基本賭け試合である。そして参加したマスターには評価に応じてファイトマネーが支払われるのだが、FUMIKOは受け取りを拒否し続けてきた。自身が限りなく黒に近いグレイゾーンに立っている自覚はあるからである。

色々アウトに近い感じだが、完全無欠のアウトよりはマシだろう、と。

「いい加減受け取ってくれないから、私たちが上から叱られるんですよ」



「そんなことは知ったこつちやないわよ。それより何？そんな世間話のために来たわけじゃないだろ」

気だるげなFUMIKOの様子に、肩を落とす12。だがそれでも仕事はこなさないといけない。

「ええと、用件は二つありまして、まずはFUMIKOさんに受け取って頂きたい物が。ワッシュバーン、あれを」

「あいさ、どうぞFUMIKO様」

著名ギターメーカーからその名を擦って与えられた12の神姫、ギター型ベイビーズ。主たる12と同様な脳天気さで彼女の上着から現れ、薬箱をFUMIKOに差し出す。

胡散臭そうにしながらも、FUMIKOはそれを手に取る。箱を開き中身を確認。

「……アタシにそんな趣味ないわよ？」

「私もないですわ」

薬箱の中身、ゴールドの指輪を見て若干引き気味の表情のFU

MIKOに対し、12はまるで予想していたかの態度だった。

「これは私からではなくオーナーからの物です」

「足利のおっさんの？……十五の女に迫る四十近いオッサンってどう思う？」

「国家権力に捕まるべきだと思いますね？」

12の替わりに答えるワツシユバーン。そしてそれに関しては12も同意見だった。もっとも本当にそういう事情なら、だが。

「いえいえ、そういう事でなくて、貴女は選ばれたということです。我らの『シユルトラウテ』に」

「どんだけ『ニーベルング』好きなんだよあのオッサン」

「シユルトラウテ」とはリヒャルド・ワーグナーの楽劇、「ニーベルングの指輪」に登場するワルキューレ姉妹の一人である。北欧神話のヴァルキューリアをモチーフとしたキャラクターである。

「で、ワルキューレって九人だけ。アタシは何番目なんだ？」

FUMIKOはワルキューレの呼称を、この劇場での裏バトルでのランキングのようなものと判断した。呼称がランキング代わりなら、順位があるはずであると。

「第四位だったと思います。他のメンバーがどうなっているの  
は知りませんが。……あ」

所詮下っ端である12はそれ程詳しい情報を持っていない。特に隠されていたりはしないが、別に必要でもないので伝えられていないのである。

そんな12の肩を叩く人物がいた。12がその場を退くと、そこにはFUMIKOより小柄な、12とは別のエージェントを従えた少女が。

染めたものなのかくすんだ色の銀髪、化粧による白い肌、暗い笑みを浮かべる小さな口、黒いゴシッククロリータに身を包んだ恐らく痩身であるう体。

日本人の平均的な感覚からすると、所謂「痛い格好」というものになる。そしてFUMIKOは思う。眼帯と包帯があれば完璧だなど。まあ、バンド時代のコスチュームを使っている自分も五十歩百歩である自覚があったFUMIKOは口には出さなかったが。

そしてその横には黒い神姫の姿。髑髏のような漆黒の機械鎧に身を包んだ大人びた女性の姿。桃髪のショートカットに顔の右半分

を覆う眼帯状のパーツ。そしてその背には、広げられた両手のような漆黒の機械翼。そして右手には力強い存在感を示す、巨大な機械鎌。

オリジナル神姫か、はたまたどこぞのメーカーの試作機かはFUMIKOには分からなかったが、少なくとも市販されているモデルではない。

相手は一応FUMIKOにも見覚えはある顔だった。この裏バトル会場で何度かそのバトルを目にしたことがある。

「確か、『ナイト・ドーター（夜の娘）』だっけ？」

そんな名前だった筈である。直接の面識はなくとも、バトルを観戦したり、噂を聞くくらいの機会はあった。

「ご存知のようで嬉しいです。その通り、私がナイト・ドーター。そしてこの子が……」

「鴉型アラストール、レイヴンだ」

ナイト・ドーターの言葉を引き継ぎ、自己紹介を行うレイヴン。その態度は些か高圧的で、恐らく主以外には敬意を持たないタイプだと、FUMIKOは判断した。

「で、そのナイト・ドクターが何の御用で？」

レイヴンの態度にムツと文句を言いた気にしているネメアを押しさえながら用件を尋ねる。仮に喧嘩になった場合、まともな装備のないネメアではどうしても不利になるだろうとの判断もあった。更に言えばネメアに対し、お前も人の事言えないだろ、とも。

「エージェントから新しいワルキューレが選ばれたって聞いてね？自分のバトルの前に見ておこうと思ったの。『姉』としてね？」

姉。その意味する所はFUMIKOにも理解できた。

「『オルトリンデ』、ナイト・ドクター。宜しくね、やんちゃな『妹さん』」

「ああ、宜しく、『姉さん』。今からあんたとやり合っのが今から楽しみだよ」

部屋に戻った直後の気の抜けた様子が、まるで嘘だったかのような癡猛な笑みを浮かべ、FUMIKOはナイト・ドクターと対峙した。



第六話 「どんだけ『ニールベルグ』好きなんだよあのオッサン」(後書き)

リア充がにくくて仕方なくなる日が近付いてきた今日この頃、皆様如何お過ごしでしょうか？どうも、郭堯です。

というわけ但今回は今までの話とまったく違うサイドの話を書かせていただきました。違法改造を施されたイリーガル神姫、そして第一話冒頭でちよつとだけ出てきたキャラなど。

こちらも今後のイベントに関わってくる部分なので、時折FUMIKO視点の話が入ると思います。

それでは今回はこの辺で。また次回、お会いしましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3987u/>

---

武装神姫 バトルシンフォニア

2011年11月28日23時57分発行